



石川 香 (Kaori Ishikawa)

武田薬品工業株式会社  
医薬研究本部中枢疾患創薬ユニット

2004年 第二学群生物学類卒業

2009年 生命環境科学研究科

情報生物学専攻修了・博士 (理学)

2000年に生物学類に入学してから2009年に生命環境科学研究科で大学院博士課程を修了するまでの9年間、筑波大学で学生時代を過ごし、大学院ではミトコンドリアDNAの突然変異が細胞の機能や性質に及ぼす影響について、培養細胞や動物モデルを用いて研究していました。

卒業後製薬会社に入社し、はじめの3年間はがんの薬、今は中枢疾患の薬を開発するための研究に従事しています。がんの部署では、ミトコンドリアに関する知識や技術(ミトコンドリア研究では、他の分野ではあまりなじみのないような実験手法を用いることがあるので、やや特殊技術かもしれません?)が仕事の内容に直結するものではなかったもので、毎日が新しいことの連続でした。学生時代からがんの分子生物学的研究に携わり、入社後すぐに即戦力としてバリバリはたらく同期たちを見て焦りを感じたこともあります。

しかし、創薬研究は「チーム力」で成り立っています。研究者がみな同じ専門性を有する必要はなく、むしろ異なった背景・知識・専門性を有する人が互いに知恵を出し合い、部門を越えて協力しながら長い時間をかけて作り上げていくものです。科学技術が発達したといわれる現代でも、自分たちヒトの身体の恒常性がどのように維持されて、なぜ病気になり、どうすればその病気に立ち向かうことができるのか、私たちはまだほとんど知らないといつてよいと思います。がんでも中枢疾患でも、「治す」どころか「進行を抑制する」ことすら、簡単ではありません。その難題に取り組むには、多くの人とのつながりが欠かせないのです。

自分の専門性だけでは早々に限界が訪れる、違った専門性を持つ人と協力することで大きく裾野を広げることができる——。この重要な「気付き」の土台は、流行りの分野だけに偏らない多様な生物学類のカリキュラムや、研究室内でのメンバーとの協力、他の研究機関との共同研究など、大学・大学院での学生生活を通じて得ることができたと思っています。

つくばは多くの研究機関が密集していて、連携大学院制度もあり、いろいろな研究分野やさまざまな専門性をもった人に触れる機会の多い非常に恵まれた環境です。つくばにいてそれが当たり前のような気がしますが、決してそうではありません。ぜひその恵まれた環境を大いに利用して、研究室内外を問わず興味や交流の幅を広げてみてください。そんな輪の中に、自分自身の研究に活かせる重要な発見があるかもしれません。皆さんの輪が広がって研究が発展し、充実した学生生活を過ごせることを祈念しています。

## 石川香の足跡

光り輝く「おでこ」から発せられるオーラ。生物学類に入学した彼女を授業で初めて見た時、これはただ者ではない（宇宙人か）と思った。

入学後は実習等で井上先生や町田先生を運転手代わりに使い（本人は図々しいとは思っていない）、生物学類のさまざまな行事にも積極的に参加しリーダーシップをとった。当方が世話人をしている総合科目（遺伝子が作る文明）では、映画「ジュラシックパーク」を2回に分けて上映しているが、TAとして2回目の授業の始めに前回のあらずじと、「なぜこの授業でジュラシックパークを上映するのか」をきわめて端的に説明した。

われわれの研究室に所属してからもその才能は遺憾なく発揮され、その堂々とした態度と教室の隅々にまでしみ通る大きな声のせいか、高校生向けの大学説明会では学生なのに教員と間違えられたらしい（沼田先生や中田先生は確か逆の経験をされたと思う）。また恐ろしいほどの記憶力の持ち主で、忘れたことは彼女に聞けばわかるという始末。忘れがちな当方のかみさんの誕生日まで覚えていて当日そっと（大きな声で）教えてくれた。

結果的に彼女は生物学類や生命環境科学研究科が用意したプログラムを堪能し、自らの才能も存分に開花させ、言いたいことも大きい声で全部言い切って卒業した。自分のことだけでなく道路の改修や、教員免許に関する手続き等、彼女のおかげで改善したことは多い。研究面では Science, J Exp Med, FEBS Lett, BBRC といった国際誌に4本の筆頭著者原著論文を書いて博士号を取得し、さらに中学高校教員一種免許と専修免許も取得して宇宙人は卒業していった。

在学中は高校の先生を目指していたが、途中から研究者に進路を変更し、めでたく天下の武田薬品に採用された。あれから3年半、そんな彼女を受け入れてくれた武田薬品の研究所は、筑波から藤沢に移転した後も彼女に申し分ない研究環境を与えている・・・添付されてきた写真の彼女の表情はそれを裏付けているようであった（おでこは確認できないが）。



石川香さん籍時の担当教員 林純一教授